

政治学概論 II 2024 w6 (2月4日3限) リーディングアサインメント:

多湖淳「内戦に対する国際介入は効果があるか」「早く終わる内戦、長引く内戦」(『戦争とは何か』)

氏名	Q1	Q2
岩田	「保護する責任」(p.106)	保護する責任には、「予防する責任」「対応する責任」「再建する責任」の三つが挙げられるが、これらを基準に国際介入する際も、国家間の政治的関係が影響するのではないかと考えるから。そのため、内戦を止めるために他国の力を必要としていても、政治的な問題で強力な国からの応援を受けることができなかつたら、解決が難しくなる。しかし、内戦は悪化すると拡大していく恐れがあるため、政治的関係に関わらず、世界の平和を守るために国際協力できるような体制を構築する必要があると考える。
内坂	p.107 私が面白いと思った箇所は常任理事国の国際介入に対する意思についてである。	国際介入が為される場合や地域についての部分が印象に残った。国際介入は安保理の常任理事国の意思が大きく反映されていることが分かった。戦死者数が多いほど、冷戦後ほど、ラテンアメリカ・カリブ海諸国は介入が早く行われる。一方、アジア地域は相対的に介入が乏しく、常任理事国の意向や関心の薄さで平和維持活動の発動のしやすさがこゝも変化するということが興味深かった。
宇名手	内戦の継続期間について(P.108~112)	私自身、「内戦」は長期間にわたって続いているものであるという印象が強かったこと、また「内戦」が起こっている地域がアフリカなど特定の地域で発生しているものであるという印象・固定観念を持っていたということもあり、要因や場所によって継続期間に大きな差があるということに驚いたから。
大石	P197 大国・先進国の優先性について	世界では平等に平和を維持することが目指されているが、行動を見るとアメリカやロシアが不利なものには拒否権を行使し、大国・先進国から離れた地域には積極的に介入しないなど土地による対応の差があることを理解するのが重要だと思ったから。また BRICS に近年注目が集まっており、どのように世界に影響を与えるようになるのか気になったから。
大久保	内戦への介入をめぐる論争(p104-p.106)	ルワンダでのフツ族とツチ族との間で起こった政治的抗争が植民地時代からの根深い影響を受けて、集団殺戮が発生した際に国際社会がどのようにアプローチする必要があるのかを考える必要がある。しかしながら、そのアプローチが国際社会による軍事的な作戦が効果を生んだ可能性が低いこともあるし、抗争や争いを鎮める直接的な影響を与えることができないこともあると考える。また、国際社会における関心度によって、そこに影響する度合いが変わってくるというのも、政治的な色が強く出てくるものだと思った。
片山	早く終わる内戦、長引く内戦108	もしも、日本で内戦が起きた場合、現在の状況的に恐らく、政府(自民党、財務省)に対して、クーデターや革命がおこる可能性が高いと思うが。その場合、継続時間的には、グラフ的に短いのかなと思う。また、どれだけ激しくなるか分からないけど、少なくとも国際社会の関心はかなり引くと思うので、介入は早いのかなと思う。このように、現在の日本の状況に当てはめて考えたら、かなりおもしろいと思ったから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
加藤	104、105 ページのルワンダ内戦に対して、国際社会が危機に関心を払わずにいたこと	ルワンダのフツ族とツチ族の対立において、他国が介入するのに時間がかかったことが重要な箇所だと感じた。フツ族とツチ族の対立において他国の介入が遅れたため、虐殺が起こったり、人道的危機に対応したりする仕組みの問題が明らかになった。この背景には、アメリカのようにアイディード派の事件の影響があったり、各国の国連平和維持活動に協力する仕組みが十分に整っていなかったりすることがあったと考えられる。しかし、グローバル化が進んだ今、内戦や貧困も他国の影響で生まれているものがあり、紛争の影響もまわりまわって周囲の国に影響を与えるのではないか。もちろん、介入によるリスクはあるが、敬遠するのではなく、組織的かつ計画的に平和維持をしていく必要があると考える。
喜多川	早く終わる内戦と長引く内戦があること (108 p～111 p)	私は内戦の期間の違いについて気になったことがなかったので、この資料を見たときに特に印象に残った。内戦の継続時間は主に内戦の種類によって違いがあり、首都をめぐる戦争は比較的早く終わるのに対して、分離独立型の内戦は、相手の意図がわかりにくく、土地から継続的に資材を調達しつつ参加者を募ることができるため、比較的長期間の内戦になるということが興味深かった。
黒田	アジアにおける国連の国際介入が乏しく、タイミングも遅いこと。p107	p109 の表 4 より、アジアの内戦継続時間の中央値は他の地域よりも桁が 1 つ多く、かつ内戦が他の地域に比べてかなり多く発生している。さらに、アジアには核を保有しているインドやパキスタン、北朝鮮、中国があるため、内戦が大きくなると核使用の危険が高まり、地球全体にダメージが及ぶと考えたため、アジアへの国際介入はより積極的に行われるべきだと思ったから。
小松原（健）	国際加入の有無 p.107	戦争や紛争、内戦が起こった際解決するには、国際介入すべき、頼るべきと考えることが多いイメージがある。ここの部分を読むと、国際介入は本当に公平なのか、意味があるのかと疑念が生じてしまう。冷戦は米ソにより拒否され、冷戦後の紛争はラテンアメリカ・カリブ海諸国への介入が早く行われるなど、常任理事国の裁量が大きいことを感じる。また、メディアによって注目されれば優先され、その他の国はおろそかになってしまうことも考えられる。解決のための国際介入は根本的な解決になっておらず、戦争や内戦の難しさを改めて感じた。
小松原（暖）	107	国連の紛争への介入には地域によって差が生じていることを本文献を通して知った。近年においても、常任理事国の拒否権によって紛争が止められないといった事例があり、世界的・歴史的に見ても安全保障理事会の常任理事国によって情勢が振り回されるという事例は多い。世界が大国の顔色を窺い、意向に従うという流れは現代の社会においてそぐわないのではないかと考えた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
高橋	国際社会が内戦の激化する前に予防措置をとることの重要性が語られているという箇所が重要だと思った。(p.106)	その理由は戦争は対立関係に決着を付ける最終手段に位置するため、内戦が勃発した時点で当事国だけでは後戻りできない段階に達していると言えるからこそ、国際社会が内戦の兆候を早期に察知し対処しなければ、その後最悪の事態にまで発展する可能性が極めて高いからである。この理由を踏まえて、国際社会が内戦の火種を早めに発見するには国連が各国家内の状況を調査・監視する役割を担ったり、世界各国が協力し合い、互いの異変にすぐ気付けるような良好な関係を築いていったりすることが重要であると考えます。
田辺	「分離独立型の内戦」で、かつ「資源が絡む内戦」の内戦継続時間が長くなっていること(110-111 頁)	分離独立型の内戦は、首都から離れた遠隔地で行われている。このような内戦は、監視が難しく戦争の資材の調達がしやすいため、戦争の長期化へとつながっている。107 頁で、アジア地域の内戦に対する国際介入が乏しく、かつ介入のタイミングが遅いことが取り上げられていたが、国際介入が乏しい要因として、その内戦が分離独立型である可能性もあるのではないかと考えた。
丹後	内戦の継続要因 p.110-111	首都をめぐる内戦は短期間で終結しやすいが、分離独立型の内戦は長期化しやすいという議論が特に納得できた。政府と反政府勢力の間で情報の非対称性が解消されにくい場合、戦争が長引くという説明が、実際の事例と整合的であると感じた。現在も続いているウクライナとロシアの戦争が長期化している要因もこのようなことが関係しているのかもしれない。
富谷	国際社会による内戦への介入が成功するためには、いくつかの条件があるという点 P 104	前回のリーディングアサインメントの「現実への対処」(『国際社会』)の中で、国際社会の混乱を直すためには間接的でしか直すことができないと書かれていたため。内戦への介入は国際社会の混乱の中への直接的なアプローチになるので、内戦への介入が成功する場合があるという事に驚いた。しかし、成功するには一定の条件があり、今までも失敗してきた事例があるという事がわかった。
西田	回帰分析の手法の話 (107 頁)	戦死者数が多く・冷戦後・ラテンアメリカ・カリブ海諸国は介入が早く、アジア地域は介入が遅いという部分が印象に残った。戦死者が多いから介入をするのでは遅いし、死者数によって介入が必要かどうかを決めているならば問題であると感じた。また、主導権を握っているアメリカ・イギリス・フランスの意向と関心によって介入が決まっている可能性があるため、それらの国との良好な国際関係を築いておかなければ介入してくれないという状況に陥る恐れがあるのではないかと考え、国際介入とは頼りに出来ないものだと感じた。
野田	戦争の種類(首都をめぐるものか独立内戦型か)によって戦争の年数が変わってくるなど、合理的に説明がつくとされる点 (110 ページ)	戦争に対して合理的な説明をしている点に、人間のいやらしさを感じた。戦争が起こるのには必ず理由があるし、その理由によってどのくらい続くかというのもある程度予想できる。そういったことをわかっていながら、あえて戦争に踏み込んでいく人間は、不思議だと思う。なぜ戦争をするのか、したがるのか、戦争でない解決方法に向かおうとしないのか、楽な方に逃げているだけではないのか、人間はとてもずるいと思った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
原田	国際介入の有無の決定について	国連平和維持活動の派遣先については安全保障理事会の常任理事国の意思が相当反映されている可能性が大いにあるという部分が面白いと感じたから。介入した条件が戦死者が多いほど、冷戦後ほど、ラテンアメリカやカリブ海諸国は介入が早く行われるという条件があるように、内戦への介入は常任理事国の関心次第というところが上下関係的なものをすごく感じてしまう部分であると感じた。内戦解決への糸口を常任理事国が握っていて単なる都合による国際介入は本当の意味で内戦を解決しようとしているのかという疑問が残った。
藤井	アジア地域は相対的に介入が乏しく、かつ介入のタイミングも遅い。(P.107)	アジア地域への介入が乏しくタイミングも遅い原因は、アメリカ、イギリス、フランスの意向と関心の反映だけでなく、アジア地域に属す常任理事国である中国とロシアがアジア地域の他国にあまり関心を持っていないからではないのかと考えたため。中国やロシアは彼ら自身が領土問題を抱えており、他地域への対応どころではないと考えられる。また、日本国民は内戦と聞くと遠い海の向こうの話のように感じ、関心は薄いように感じる。日本は非常任理事国に選ばれることも多く、国際安全保障に高頻度に関わるため改善していくべきだと感じた。
藤田	内戦が終わったあとの平和は平和維持活動によって長時間維持できるという効果がある。P102	内戦終結後の平和維持活動は、平和合意の履行を監視し、武装解除や治安維持を支援することで、再紛争化を防ぐ重要な役割を果たしている。特に、政府と反政府勢力の間に信頼がない場合、中立的な PKO 部隊が緩衝地帯を設置し、安定を確保することで平和の定着を促す。また、難民の帰還支援や選挙監視を通じて民主的統治の基盤を強化する点も注目すべきだ。内戦後の不安定な時期に PKO が機能することで、長期的な平和構築が可能になるため、非常に重要である。
本田	「介入には軍事的な派兵の意思決定を各国が迅速に行う必要があるができなかった。」P105	私は、この部分を読んだときなぜ各国が協力すればすぐにもできそうなことができないのだろうと考えていた。文章を読んでみると、ゲリラ攻撃によって襲われたアメリカ軍のトラウマが原因であるのだと知った。私はアメリカと言えば世界最強というようなイメージがあった。しかし、アメリカ軍も皆人であり、どれだけ強い武装をしていたとしても、恐れによって戦いに向かおうとしないこともあるのだと知り、興味深かった。
本間	p107 国連平和維持活動は安全保障理事会の五大国の意思が反映されている	国際介入を行う国連平和維持活動でさえ、派遣先については安全保障理事会の常任理事国の意思が反映されていることを知り、大国の関心が低いアジアで戦争が起こった場合は、被害が大きくなると感じたため重要だと考えた。
松本	p.107 欧州への介入の可能性が高い	アジア地域に比べて欧州への介入の可能性が高いことについて述べられており、アジアでも内戦など起こっているのになぜ欧州への介入の方が多いのか疑問に感じたから。安全保障理事会に属している国がアジア地域よりも欧州との関係が強いためこのような結果を生み出すのではないかと感じた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
三島	分離独立型の内戦は、相手側の意図をはかることがより難しい。111 ページ	この文章が面白いと感じたのは、分離独立型の内戦では、単なる領土争いではなく、相手の真の意図や妥協の余地が不透明である点が強調されているからだ。国家の統一を維持したい側と独立を求める側では、交渉の前提やゴールが根本的に異なり、互いに相手の妥協点を測ることが困難になる。この視点は、内戦の長期化や和平交渉の難しさを説明する上で示唆に富んでいるからである。
吉岡	介入効果の研究	戦争の再起と国際平和維持活動との関連性を見ると、長期的な平和維持活動というのは内戦の再発までの期間を延ばす効果がみられるということが分かっていることを知った。また、内戦への国際的な介入内戦の発生に影響を与えていることが分かる。このことから、内戦などの紛争というのは国際的な平和維持に向けた取り組みが非常に大切であると考えた。
渡邊	国際社会の内戦への介入について (105 ページ)	ルワンダの例を見ると、国際社会がこの危機にもっと関心払っていたら大量の死者ははず、内戦も早めの終結がされたのではないかと思ったからである。また、内戦に早期的に警戒し、介入することには、誰が決めるのか、誰が実行していくのかという問題も出てくると思われるが、早めに関心を払っておくことで内戦の状況、兆候などを早めにつかむことができ、対応策も考えることができるので、多くの国が内戦についてもっと関心を示すことが重要だと思ったため。